

■エピローグ■

今回の展示では、食べることにしかかわるものとして、とる、たべる、だす、ささげるという4つの行為を取り上げました。

まず、とる行為に利用された道具や、実際に食料となったものの出土は決して多くありません。

これは当時の人びとが、それらの資源を限りなく有効に使っていたためと考えられそうです。

次に、たべることに使われる土器は数、種類ともに多くみられます。

これらの土器は、調理、貯蔵、食事、加工など当時の人びとの食生活をきわめてよく反映していると思われます。

一般的にはあまり触れられない、だす行為もまた食にもとづくものと考えられます。

今後、寄生虫卵や花粉の分析データが蓄積されれば、より具体的な食生活の復元が可能になるでしょう。

最後に、食物や器をささげる行為には、食べることを通して生と死を分かちという、当時の人びとの意識がはたらいっていると考えられます。

今回紹介した、食べることにしかかわる痕跡には、多様な食材をおいしく、いつでも食べたいという、古代人から私たちに連綿と受け継がれる気持ちをみてとれるのではないのでしょうか。

音声ガイドをお聞きいただきありがとうございました。

今回の案内は四国めたんがお送りいたしました。

またのご来場を心よりお待ちしております。